

松下電送システム57年略史

～半世紀をこえて～

目次

社長挨拶	1
出来事・商品で振り返る57年間の歴史	2
写真で見る松下電送システム	12
OB・社員のエポック回想録	17
データ集	20

社長挨拶



代表取締役社長

山本 亘 苗

ありがとうございました。

2002年で偉大なる歴史に幕を閉じます。

お客さまとともに57年2ヵ月。

お客さま、そしてご支援いただいた皆さんに
心より、ありがとうございました。

最初の30年は量的拡大を追い求めました。

創業の苦勞もありましたが、響き合う心がありました。

新聞や報道向け開発に突進しました。

そして開発技術と開拓営業を積極果敢に展開したのです。

ルーツブランドの時代です。

つぎの15年は質的向上を推し進めました。

経営の苦心がありましたが、気概にあふれていました。

ファクシミリの拡充に邁進しました。

そして国内外の販売会社やサービス会社で飛躍しました。

パナファックスの黄金期です。

最後の12年は価値転換に取り組みました。

変身の不安はありましたが、やりがいに共感しました。

デジタル複合機やIPの開発に挑戦しました。

そして九州松下との合併を軸に新会社づくりに邁進しました。

パナソニックの時代です。

2003年から新しい歩みがはじまります。

お客さまとともにいつまでも。

お客さま、そしてご支援いただいた皆さんに、
心より、ありがとうございました。

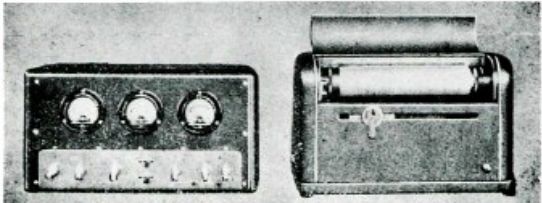
2002年12月

出来事・商品で振り返る57年間の歴史

1945 » 1960

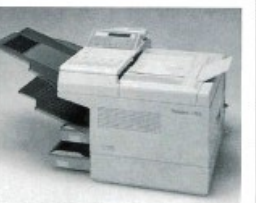
当社の出来事

世の中の出来事
自分史

1945	1946 - 1950	1951 - 1955	1956 - 1960
昭和20年	昭和21年 ~ 昭和25年	昭和26年 ~ 昭和30年	昭和31年 ~ 昭和35年
11月1日 社団法人同盟通信社の技術研究所を母体に、有限会社同盟電機製作所を設立 資本金10万円	46年11月 「ページ式模写電送機」を電気通信展覧会に出品 47年8月 中目黒の本社工場を拡張 資本金を50万円に増資 48年8月 「テープ式文字電送機」を新聞展覧会に出品、両閣下が見学 48年9月 臨時社員総会を開催、株式会社に組織変更するとともに、資本金を100万円に増資 48年10月 現本社所在地に下目黒分工場が完成、本社5名、分工場45名体制に 49年4月 同盟電機株式会社に改組し、正式発足 大阪事務所を設置 警察庁にページ式FAXを納入 50年1月 日本電送機株式会社と合併し、東方電機株式会社を設立 50年6月 資本金を500万円に増資  ページ式FAX1号機  初の二重通信用テープ文字電送機	51年6月 下目黒の新工場が完成し、3工場制を実施 51年11月 GHQ受注用に臨時横浜事務所を開設 53年4月 中目黒工場、下北沢の組立工場と研究部を下目黒に移転・集中 53年7月 東方電機労働組合を結成（組合員：132名） 電力・気象庁・国鉄など官公庁の情報システムを開発着手 中国を皮切りに海外進出の第一歩を踏み出す 54年 資本金を1000万円に倍額増資 55年12月 資本金を2000万円に倍額増資 東方電機労働組合が電機労連に加盟  民衆1号機になった W1-FAX送受信機  気象庁用 気象模写送画装置  気象庁の天気図を受信する W1-F型気象模写受信装置  初の1筐体型の 201-F型ポータブル写真送信機	56年1月 定時株主総会並びに取締役会で、三井銀行恵比寿支店長原鴻氏が社長に就任 59年1月 中目黒工場を売却 59年7月 本社工場の隣接地300坪を買収 60年5月 本社に新工場2棟完成 60年6月 職制の一部改正を実施  電電公社へ納入した 2号模写電送信装置  初めてトランジスタを応用した 201-G型ポータブル写真電送機
・広島・長崎に原爆落下、8月15日終戦 ・共同通信社・時事通信社発足 ・国際連合が成立	・欧州経済協力機構発足 ・経団連発足 ・関東大震災 ・北大西洋条約機構（NATO）結成 ・中華人民共和国成立	・日米安全保障条約調印 ・サンフランシスコ講和条約調印 ・日米友好通商航海条約調印 ・国際電信電話会社設立 ・ワルシャワ条約機構成立	・日本、国際連盟に加盟 ・皇太子（現天皇）御成婚 ・日米新安保条約調印

1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970
昭和36年	昭和37年	昭和38年	昭和39年	昭和40年	昭和41年	昭和42年	昭和43年	昭和44年	昭和45年
5月 東方電機株式会社のサービス部門発足	2月 創業者古野伊之助が松下幸之助氏との会談で再建を要請	1月 目黒公会堂で第1回経営方針発表会を開催	6月 日本ファクスホン販売株式会社を設立	1月 社歌を発表	3月 目黒本社内にショールームを開設	4月 第1週5日制を導入	1月 東方電機販売株式会社を設立 資本金：1000万円	1月 202型カラー写真電送機が日刊工業新聞社「増田賞」を受賞	1月 労働協約を調印
	9月 東方電機社報を創刊	社章と商標を統一	松下電器健康保険組合に加入	9月 社旗が決定	4月 新聞FAXが第12回「大河内記念技術賞」を受賞	5月 第1号サービスカーを導入	2月 米国・リトコム社と販売・技術協定を締結	6月 米国ビジュアル・サイエンス社及びデータ・マックス社と販売協定	7月 東方電機から松下電送機器に社名変更
	11月 松下電器と提携し、松下グループの傘下に入る	就業規則を制定	9月 社は5則を制定	本社第2工場増設工事完成（165坪・鉄筋2階建）	創業者古野伊之助氏が逝去		本社工場を新築（鉄筋5階建）し、調整工場の上に3・4階を増築		社章を新たに制定
	東方電機労働組合、松下系列労働組合協議会に参画	資本金を6000万円に増資	10月 米国のA・Bディック社と技術提携	10月 資本金：1億2000万円に増資				7月 長野県小県郡東部町に長野第1工場が完成	9月 東方電機販売及び東方電機サービスをナショナル電送機器販売及びナショナル電送機器サービスに社名変更
	12月 日比谷会館内に営業所を新設、サービス部を新設、工場制を敷く	7月 目黒本社に精密機械工場として第2工場完成	12月 東方電機サービス株式会社を設立、年中無休24時間体制を整備						11月 創業25周年を記念し、第1回創業記念式典を開催
	第1次5ヵ年中期計画を発表	11月 長野県小県郡東部町の工場用地購入契約に調印							隔週5日制を実施
		 B-6判小型FAX SD-11型模写電信送信機	 静電記録方式による LD-40型気象FAX	 大河内記念技術賞を受賞した 501型新聞FAX送信機	 報道機関の省力化に貢献した初の 全自動写真電送機	 ES-20ビデオファクス送受信機	 メキシコオリンピック用に開発した 203B/KカラーフォトFAX	 乾電池による運転も可能な 201-Mポータブル写真電送機	 初の送受信兼用タイプの海外機 KD-111
・米国、ケネディ大統領就任 ・ソ連、初の有人宇宙船打上げ成功 ・農業基本法公布	・堀江謙一氏、小型ヨットで太平洋横断 ・北陸本線北陸トンネル開通	・ケネディ大統領、ダラスで暗殺 ・日米間テレビ宇宙中継受信に成功 ・電電公社、準専用制度により加入FAXの実用化推進	・東海道新幹線開通 ・東京オリンピック開催 ・外国映画輸入自由化	・ソ連、初の宇宙遊泳に成功 ・朝永振一郎氏、ノーベル物理学賞受賞 ・日中総合貿易協定調印	・中国文化大革命 ・ビートルズ来日 ・日ソ貿易協定調印	・欧州共同体（EC）成立 ・ツイギー来日、ミニスカートブーム ・吉田茂元首相逝去、戦後初の国葬実施	・露ヶ関ビル完成 ・小笠原諸島が日本に復帰 ・CCITTがG1規格を勧告	・米国、ニクソン大統領就任 ・東名高速道路開通 ・米宇宙船アポロ11号月面着陸成功	・大阪万国博覧会開催 ・日航機「よど号」ハイジャック事件 ・米ソ、戦略兵器制限交渉開始

1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年	昭和55年
3月 松下技研と技術提携 7月 毎年7月21日を命知記念日に制定 9月 ナショナルパナファックスの商標使用決定 11月 松下電器・特機営業本部と販売提携、全国販売網を確立	6月 部門別自主責任経営制度を導入 8月 松下グループ加盟10周年記念「社内計算競技大会」を開催	1月 レーザープレスファックスが日刊工業新聞社10大新製品賞受賞 3月 回線開放を機にパナファックス本部を新設 5月 資本金：3億6000万円に増資 7月 富士通とFAXのOEM契約を締結 11月 米ビジュアル・サイエンス社、3M社、英プレッシー社と販売提携 12月 長野第2工場完成 NHKと共同開発した世界最高速の 3秒FAX 東京地区回線開放に合わせて発売した パナファックス2000	1月 完全週休5日制スタート 3月 米ビジュアル・サイエンス社と合併して「M.G.V.S社」を設立 通電感熱記録方式の パナファックス1000	11月 創業30周年記念式典を目黒公会堂で開催 創業30周年記念「ファクシミリ総合技術展」を開催 中速機市場の拡大に貢献した パナファックス3000	3月 第1回青年重役会を開催 10月 湘南工場が完成 11月 第1回社内運動会を実施 12月 資本金：7億2000万円に増資 世界に先駆けて20秒電送を実現した UF-20Sシリーズ	6月 米ビジュアル・サイエンス社とパナファックス・コーポレーションを設立 第1回家族ぐるみ観劇会を帝国劇場で開催 8月 第1回パナファックス優秀セールスマン大会を目黒雅叙園で開催 国際G2規格に初めて準拠した パナファックス5000	4月 松下経営理念の「綱領・信条・七精神」を導入 6月 松下電器第一特機開発部として事務機器事業部の歴史幕開け 11月 資本金：14億4000万円に倍額増資 12月 新社内報「あさかぜ」を創刊 世界初のメモリー同報機能を内蔵した UF-2200	7月 長野工場第3棟完成 12月 ナショナルPPC第1号機出荷 岡山県新見市の小野田セメント跡地の売買契約を締結 世界ではじめてG3規格に適合した UF-20SG 松下で初の複写機 FP-1800	9月 展示用パナファックス・カー「ひまわり号」完成・全国主要都市に配備 UF-520がFAXで初めてグッドデザイン賞を受賞 11月 松下電器事務機器事業部発足 世界のどのFAXとも通信可能な UF-520Ⅲ
・沖縄返還協定調印 ・円変動相場制に移行 ・NHK総合テレビ、全カラー化	・札幌冬季オリンピック開催 ・連合赤軍、浅間山荘事件勃発 ・公衆通信網の開放、広域時分制開始	・郵政省、電話FAXを認可 ・電電公社、東京地区の回線開放 ・江崎玲於奈氏、ノーベル物理学賞受賞	・改正商法施行 ・堀江謙一氏、ヨット世界一周に成功 ・佐藤栄作氏、ノーベル平和賞受賞	・ベトナム戦争終結 ・沖縄海洋博覧会開催 ・第1回サミット、仏で開催	・ロッキード事件、田中首相逮捕 ・中国、天安門事件 ・CCITTがG2規格勧告	・初の気象衛星ひまわり打上げ成功 ・巨人・王貞治、ホームラン世界新記録達成 ・日本赤軍、日本航空機をハイジャック	・新東京国際空港（成田）開港 ・英国、初の試験管ベビー誕生 ・第5回サミット、東京で開催 ・第2次オイルショック	・英国、初の女性首相・サッチャー首相誕生 ・第5回サミット、東京で開催 ・第2次オイルショック	・初の衆参同日選挙実施 ・CCITTがG3規格勧告 ・KDD、国際公衆回線開放

1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990
昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年
4月 ナショナル事務機サービス株式会社設立 6月 資本金：15億円に増資 第1回全社競技大会開催 7月 東京ナショナルOAセンターが京橋ナショナルビルにオープン 10月 松下電器事務機器事業部宇都宮工場完成 12月 サービス会社を松下電送サービス(株)に社名変更	3月 松下電送機器株式会社から松下電送株式会社に社名変更 4月 ミニファクスが第11回日本産業技術大賞・内閣総理大臣賞を受賞 5月 岡山県新見市に岡山工場が完成 7月 「パナファクス協会」を設立 8月 100%松下出資会社、米国パナファクス社が再スタート	1月 OAシステム事業部発足 2月 OA専門販売の呼称を全てナショナルOAシステムに変更 5月 岡山工場の電子デバイス棟が完成、密着イメージセンサー生産開始 11月 岡山工場、光ディスクの生産開始	4月 本社技術棟(現B棟)が完成 8月 ピトニーボーズ社とOEM契約を締結 9月 第1回松下電送技術シンポジウムを開催 11月 長野工場第4棟が完成	4月 社友会設立総会を雅叙園で開催 5月 岡山工場でパナボード生産開始 10月 創業40周年技術フェアを開催	2月 パナメモ107が日経・年間優秀製品賞・最優秀賞を受賞 7月 松下事務機器製造有限会社(MBM)設立 10月 第1回品質改善事例展示会を開催	2月 第1回PSS(パナファクス・スーパー・セールスマン)大会を熱海で開催 3月 決算期を11月30日から3月31日に変更 4月 ナショナルからPanasonicにブランド変更 9月 シンガポール松下電送(株)(MGS)を設立	4月 松下電器・家電ルートに本格参入 10月 「自己申告制度」「社内公募制度」を導入 大森吉五郎・取締役相談役が逝去 12月 松下電器のシステム営業本部に直販営業部隊を移管 湘南工場管理棟完成	1月 フレックスタイム勤務制度を目黒技術部門対象に試行開始 3月 イギリス松下電送(株)(MGUK)を設立 本給を基本給・基本職能給・個別職能給の3分割に 4月 ソフト会社に出資し、松下電送ソフトウェア(株)に社名変更 6月 新潟工場完成 11月 岡山工場のクリーンルーム第2棟とデバイス組立て棟が完成	3月 イギリス松下電送(株)が生産開始 4月 HP社とインクジェットプリンターの購買/FAXのOEM契約を締結 6月 環境憲章を制定 7月 育児休業制度を導入 11月 リフレッシュ休暇を導入 12月 第1回QM大会をOAセンターで開催
	 小型軽量の感熱20秒FAX UF-920	 FAXとパソコンを一体化した初のパソコンFAX CFSシリーズ	 操作手順や通信状況が「見える」小型高速FAX UF-2	 フリースキャナ方式の電子黒板 パナボードUB-1800・1200	 G4規格に合致した普通紙3秒FAX UF-6400	 パーソナルカラー複写機・コピルマン FN-P300	 ビジネスカラー複写機 FP-C1	 高速・高画質・大容量メモリー搭載のセンターマシン UF-90	 Qiシリーズ FP-1670
・電電公社、ミニファクスサービス、FAX通信網サービス開始 ・郵政省の電子郵便サービス開始 ・福井謙一氏、ノーベル化学賞受賞	・フォークランド紛争 ・東北・上越新幹線が開通 ・IBM産業スパイ事件	・東京ディズニーランド開園 ・大韓航空機墜落事件 ・三宅島大噴火	・グリコ・森永餡料事件 ・NHK、衛星放送開始 ・INSモデル実験開始	・CCITTがG4規格勧告 ・電電公社、専売公社が民営化 ・つくば万博開催	・男女雇用均等法施行 ・ソ連、チェルノブイリ原発事故 ・伊豆大島の三原山大噴火	・国鉄分割・民営化 ・利根川進氏、ノーベル医学・生理学賞受賞 ・ニューヨークで株大暴落・ブラックマンデー	・青函トンネルのJR津軽海峡線開業 ・松下電器と松下電器貿易が合併 ・TTC、G4FAXの国内標準規格決定	・昭和天皇崩御 ・消費税3%課税施行 ・ベルリンの壁崩壊	・礼宮親王殿下御成婚 ・松下電器、米国MCA社を買収 ・東西ドイツ統一

1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年
5月 SIC主催第1回イメージネットワーク事例内覧会を開催 11月 第1回品質総合展を5事業場で巡回展示	4月 松下電送サービス(株)12社を合併し、CS事業部を発足 「第1回文字認識技術コンテスト」で最優秀賞受賞 8月 長野工場、LRQAによるISO9002認証を取得 9月 コアレスフレックス製の試行開始 10月 新潟工場、LRQAによるISO9002認証を取得 松下電器情報通信システムセンターに技術研究所から約70名が出向	10月 MGUKがNQAによる「ISO9002」認証を取得 11月 MGS内に国際調達室、IPOを開設	2月 MGSがヤーズレーによる「ISO9002」認証を取得 4月 目標チャレンジ制度スタート 7月 松下電送ビジネス株式会社(MGB)を設立 12月 目黒本社がLRQAによる「ISO9001」認証を取得	4月 就業時間を1日7時間45分に短縮 9月 フィリピン松下事務器株式会社(MBP)を設立 岡山工場を閉鎖 11月 創業50周年記念式を開催	2月 ホームページを開設 3月 ドライプロッターが日本新聞協会技術開発賞を受賞 長野工場に初のトナーカートリッジ用樹脂成型機導入 6月 トナーカートリッジ量産スタート	4月 インターネットFAX研究会を設立 長野工場で24時間稼働を開始 5月 新潟工場がISO14001認証取得 8月 BABT(英国通信認定局)の総合品質保証認定を取得 10月 シンガポール松下電送がISO14001認証取得 11月 松下電送ビジネスサービス株式会社設立	3月 事務機器事業部(宇都宮)がISO14001認証取得 4月 松下電送システム株式会社スタート 長野工場がISO14001認証取得 MBP(5月)、MGUK(7月)がISO14001認証取得 11月 湘南事業場がISO14001認証取得 12月 全国システム会社・松下電器とドキュメント事業基本契約を締結	9月 CS事業部で直行動務の試行スタート 10月 長野工場が2班1勤務制度試行スタート 11月 ISO9001品質システムを全社で一本化	4月 国内生産拠点の再編を実施(門真・大東工場を閉鎖) WORKIO2000/2500を発売 事業創造・技術展を品川で開催	2月 目黒本社・新A棟完成 松下電器・九州松下とカラープリンティング開発プロジェクト発足 3月 ドイツ松下事務機器株式会社(MBM)を閉鎖 4月 品質11Q番スタート 10月 松下電送グラフィックプリンティング株式会社(MGP)が発足 松下電送ソフトウェア株式会社を全額出資子会社に体制変更	3月 イギリス松下電送(MGUK)とシンガポール松下電送(MGS)を解散・閉鎖 4月 松下電送マニファクチャリング株式会社(MGM)発足 MGMがドキュメント電子化サービスを開始 松下グループの事業再編発表、2003年1月1日に九州松下、松下通信と新会社設立
 FAXメールシステム パナメールUX-5000	 FAX専用レーザープリンターを搭載した UF-B77		 世界最小・最軽量のデジタル携帯FAX	 Jr.シリーズ FP-7113	 世界初のインターネットFAX FreePort i66	 Jr. II シリーズ FP-7715	 新世代デジタル画像複合機 ハイパー パビルス	 大型ディスプレイ搭載のパーソナルFAX パナファクスA5CL	 インナー排紙機構を採用したデジタル画像複合機 WORKIO DP-2000/2500	 SOHOや家庭向けデジタルネットワークゲートウェイ DN-G200	 次世代ネットワーク デジタル複合機 WORKIO DP-6010/4510
・湾岸戦争勃発 ・新宿に新都庁舎完成 ・雲仙・普賢岳で大火砕流	・暴力団対策法スタート ・リオデジャネイロで地球環境サミット開催 ・毛利飛行士がスペースシャトルで宇宙へ	・皇太子殿下御成婚 ・細川連立内閣発足 ・Jリーグ開幕	・関西新空港開港 ・大江健三郎氏、ノーベル文学賞受賞 ・オリックス・イチロー、200本安打達成	・阪神大震災発生 ・製造物責任(PL)法施行 ・PHSサービス開始	・O-157による集団食中毒発生 ・ペルー日本大使公邸人質事件 ・小選挙区制で初の総選挙実施	・香港が英国統治から中国へ返還 ・臓器移植法成立 ・山一證券が廃業申請	・長野オリンピック開催 ・郵便番号7桁制実施 ・フランスワールドカップに日本初出場	・欧州統一通貨「ユーロ」導入 ・改正男女雇用均等法施行 ・初の脳死判定による臓器移植手術実施	・コンピュータ2000年問題 ・シドニー五輪女子マラソンで高橋尚子が金メダル獲得 ・白川英樹氏、ノーベル物理学賞受賞	・中央省庁再編で1府12省庁に ・野依良治氏、ノーベル化学賞受賞 ・米中核部に同時多発テロ	・ワールドカップを日韓で共同開催 ・小柴昌俊氏がノーベル物理学賞、田中耕一氏がノーベル化学賞を受賞

写真で見る松下電送システム

■ 創業期 1945 - 1960

同盟通信社の解散に伴い、1945年11月1日にその技術研究所を母体に有限会社同盟電機製作所がスタート。これが、松下電送システムの創業である。1950年に日本電送機株式会社と合併し、東方電機株式会社として模写電送機やFAXの開発を進めた。しかし、経営は不振を極め、倒産の危機に瀕していた。



東京・下北沢にあった同盟通信社技術研究所の正門



1945年解散前の同盟通信社技術研究所の作業風景



模写電送機の開発風景



同盟電機製作所時代（右）と同盟電気株式会社時代（左）の商品カタログ



同盟式模写電信装置の取扱説明書（1949年4月）



1951年頃の東方電機社員

1950年、設立当時の東方電機の社屋

■ 新生期 1961 - 1970

倒産の危機に瀕していた東方電機の再建を創業者古野伊之助氏が旧知の友人である松下幸之助氏に要請した。これが1962年2月のことであった。こうして同年6月に東方電機は、念願の松下グループ入りを果たした。11月の臨時株主総会で、大森吉五郎氏の会長、木野親之氏の常務、松下幸之助氏の取締役就任を決めた。翌年1月に第1回経営方針発表会が行われ、ここから経営再建への第1歩を大きく踏み出した。



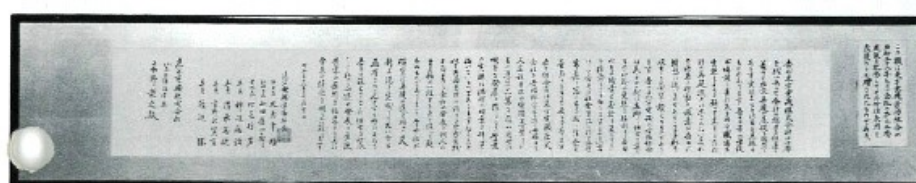
1962年当時の東方電機の社屋



1963年1月に日黒公会堂で行われた第1回経営方針発表会



1962年2月、創業者古野伊之助氏と松下幸之助会長（当時）の歴史的会談



1963年7月、労働組合から本野常務に提出された労使共栄の決議表明文書



1969年1月、202型カラー写真電送機が日刊工業新聞社「十大新製品」トップの増田賞を受賞



1969年7月、FAX量産工場として長野工場第1棟が完成



1970年1月、木野代表（左）と小南執行委員長（右）が労働協約を正式に調印



1966年4月、新聞FAXが第12回大河内記念技術賞を受賞、その授賞式



1970年7月、「松下電送機器株式会社」に社名変更

■ 建設期 1971 - 1980

1972年11月、地方から電電公社の回線開放が始まり、翌年3月の東京地区の施行で全国が開放された。専用線に利用が限定されていたFAXもこれを機に膨大な民間市場が広がり、松下電送機器は超優良企業へ大変貌を遂げていく。1975年には創業30周年を迎え、高輪プリンスホテルでファクシミリ総合技術展を開催し、マスコミをはじめ各界から大きな注目を集めた。



1971年、命知一年経営方針発表会を開催



1973年1月、レーザープレスFAXが1972年日刊工業新聞社十大新製品賞を授賞



1978年、複写機の試作機を松下幸之助相談役に視察に訪れた



1974年11月、日黒区民センターで緊急幹部会を開催



1975年11月、創業30周年記念式典を目黒公会堂で開催



1976年10月、神奈川県茅ヶ崎市に湘南工場が完成



1976年11月、第1回社内運動会を松下電器東京グラウンドで開催



1980年3月、門真から品川に複写機の生産拠点を移した当時の品川工場全景

■ 発展期 1981 - 1990

ファクシミリ市場が急速に拡大し、本格的な普及期に突入。松下電送からもUF-920/1000/2/82とヒット商品を連続して市場投入した。また、拠点も国内は岡山、新潟に生産工場を建設し、また東京では営業部隊が京橋のナショナルOAセンターに集結した。一方、海外もシンガポール、イギリスに新たな生産拠点を設立した。組織面では、1988年に松下グループの直販部門統合化のために、民需・官需の直販営業部隊の約170名が松下電器に移籍した。



1981年7月、京橋ナショナルOAセンターがオープン



1981年10月、事務機器事業部宇都宮工場2棟が完成



1982年5月、岡山県新見市に岡山工場が完成



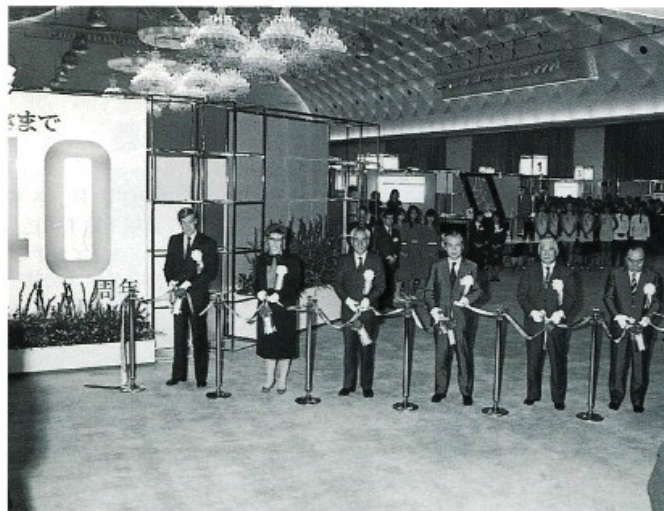
1983年1月、電子ファイルなどを生産・販売するOAシステム事業部が発足



1984年6月、サービス会社本社が恵比寿から五反田に移転し、サービスコントロールセンターを新設



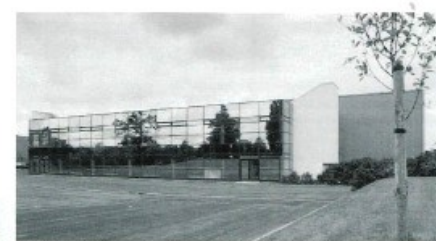
1985年4月、社友会設立総会を雅叙園で開催



1985年10月、創業40周年を記念して東名阪で創業40周年技術フェアを開催



1987年9月、シンガポール松下電送株式会社(MGS)を設立



1989年3月、イギリス松下電送株式会社(MGUK)を設立



1989年6月、新潟県小千谷市に新潟工場が完成

OB・社員のエポック回想録

57年2ヵ月の歴史の中には、会社のエポックとなる出来事が数々ある。その中からテーマを絞り、OBや社員の方々に当時の思い出や裏話を回想していただいた。当社の歴史を振り返る上で、重要なポイントとなる。

■ 日本電送機と合併し、東方電機を設立(1950年)

1950年に同盟電機株式会社と日本電送機株式会社が合併して、東方電機株式会社が誕生した。もう半世紀もまえのことなので、正確な記憶はない。ただ、合併当時の新年会を元売店があった建物(旧A棟)の2階で行った時、両社の社員が2つのかたまりで並んでも、60坪もある床面は空間がありすぎて、大きな建物だと驚いた。そのくらいしか人員がいなかったのである。両社には、同盟技術研究所で仲間だった者もいて、全く縁のないものが一緒になったとの違和感はない

かったと思う。約4年間の別離ではあったが、事業内容には違いが生じており、むしろそのことがその後の発展に繋がったと思っている。

松下グループに入った後も、目黒川と並行に建てた社屋に「東方電機」と浮出した文字が残っていた。私が目黒工場に移動した時、あの新築の建物の2階を作業場として使ったので、特に印象が強く、今でも目に浮かぶ。



久貝達也さん
(社友会)

■ 松下電器と提携し、松下グループ傘下に入る(1962年)



津村勝弥さん
(社友会)

1962年に、経営再建のために木野取締役が着任後、特に力を入れたのは、社内的には①社内の整備・清潔化、②中堅幹部の育成であった。当時、課長になりたての私も、その中堅幹部教育の洗礼を受けた。ある日、「中堅幹部は明日、昼休みになったら直ちに会議室に集まれ。昼食は会社で用意する」(用意された昼食は「きつねうどん」であった)という指示が出された。これが「昼休み返上」の中堅幹部教育の始まりであった。そして、木野取締役自ら講師になり、「仕事に対する姿勢」「原価構成のあり方」「部下の指導の仕方」などについて、熱心な指導が続いた。

またその後、世間では週休2日制が始まり、当社も隔週での週休2日制がスタートした。しかし、中堅幹部はこれも「お預け」で、一般社員が休みの土曜日は朝から晩まで研修が行われた。この集中強化研修で学んだ事柄は、産業人、企業人としての基本で、後日会社が「松下電送」として発展を続けるに伴って、私達もより高度な知識、能力を必要とする機会が増えた。その時の判断、遂行の規範として大きな力となった。

■ 松下電器事務機器事業部発足(1980年)

事務機器事業は、1978年に第一特機開発部として複写機の開発をスタートし、1979年に品川の東京ステレオ構内に量産工場を立上げた。1980年に事務機器事業部が誕生し、翌1981年には本格的な事業の拡大をめざして宇都宮工場を建設。私はその時宇都宮へ転勤して、宇都宮での採用一期生とともに工場の立上げに携わった。

1982年に宇都宮での生産がスタートしたと同時に、OEM先のサクソン・オリンピアの事業悪化により生産

量が半減。3ヶ月間近く半日生産、後は草むしりに石ころ拾い、そして今のテント倉庫のあるところにグラウンドをつくったり、勉強会を行ったりした。全員のモチベーションを維持するための努力に四苦八苦の毎日であったことを強烈に覚えている。仕事が無く暇になるほど辛いものはない。それ以前も、それ以降もそんなことはなかったが、なかなか黒字にならない事業であった辛さも忘れていない。事務機器事業部が黒字になったときの喜びは、人一倍大きなものだった。



伊藤 正
(MGM事業開発グループ)

■ 変革期 1991 - 2002

FAX業界は、1988年をピークに年々下降をつづけていった。松下電送も1991年の約65億円の赤字をピークに厳しい経営を余儀なくされた。そんな中、1992年にはサービス会社の持つ経営資源を最大限に生かすべく、松下電送サービス株式会社12社と合併。1998年には、松下電器事務機器事業部と事業統合し、社名を松下電送システム株式会社に改称した。事業もFAXからデジタル複合機などドキュメント機器を扱うドキュメントカンパニーへと変貌を遂げていった。



1992年4月、松下電送サービス12社と合併、CS事業部を発足



1995年1月、阪神大震災発生後も、CS事業部社員を中心に素早く復旧対応
1996年3月、ドライプロッターが日本新聞協会技術開発賞を受賞、表彰を受ける樋野社長



1996年2月、技術研究所が中心となってインターネットのホームページを開発



1997年8月、アジアで初めてBABTから総合品質保証認定(FQA)を取得



1998年4月、松下電送システム株式会社発足、片山社長から方針が発表された



1998年12月、全国システム会社、松下電器とドキュメント事業基本契約に合意



2000年4月、事業創造・技術展を品川・マルチメディアセンターで開催



2001年10月、松下電送グラフィックプリンティング株式会社発足式を開催



2002年4月、各事業場で松下電送マニュファクチャリング株式会社発足式を開催

■ FAXの時代到来・UF-520/1000大ヒット(1980年代前半)

UF-520は世界のあらゆるファクシミリと相互通信可能なマルチモードFAXとして1980年に、そしてUF-1000は世界初のOAインターフェイス機能搭載のOAFAXとして1982年に商品化された。

当時、長野事業部の商品技術部で技術管理を担当していた私は商品企画会議の事務局として、木野社長や城阪副社長など経営トップの方々に、商品の市場性や投入時期を審議いただくという役割を担っていた。

時あたかもCCITT・GⅢ規格が勧告され、FAXが世界的に大ブレイクしようとする時期にあり、経営陣の超高速機に対する期待は大きなものがあっただけに、

開発部門に対する要求は大変厳しいものがあった。商品企画会議が終わったあと、いつも胃が痛くなる思いをしたのを今でも鮮明に記憶している。当時の新製品開発はパナファクスフェアでの発表をターゲットにしており、開発納期の確保は至上命令であった。

UF-520/1000は、創業10周年を経た長野事業部が、新たな決意を含め、各部門が一丸となって血のにじむ取り組みの結果、市場に送り出した記念すべき商品である。その後両モデルともシリーズ化され、長期にわたり電送の経営に大きく貢献した。



浅倉邦彦さん
(社友会)

■ 新潟工場完成・世界最大規模のFAX量産工場(1990年)



内山小百合さん
(新潟FC第一
MFPチーム)

約14年前の新潟工場を思い出してみた。入社試験を受けた頃は、まだ更地の広場。そして入社時は、建築中。ようやく6月中旬くらいに新潟工場へ通勤となった。当時は、Cラインでの組立作業で、A・Bラインは工事中だったように思う。徐々にパート社員・中途採用の方が入社し、人数も増え、ラインも3本から4本へと増えていった。

自分のことでは、9月にオープンとなった組合売店『アイビス』の初代店長として3年半ほど売店の仕事

をした。入社して半年の未熟者の18歳であり不安もあったが、多くの方に支えられ、とても楽しく店長の仕事をする事ができた。以後、職場異動し、現在はMFPチーム。育児休業明けで、この4月に約1年3ヵ月ぶりに職場復帰したのだが、入社当時からあったA・B・Cラインがなく、工場内が随分と変わっていることに驚いた。今後はどのように変貌していくのだろうか?

■ サービス会社を合併し、CS事業部を発足(1992年)

今でも大事にしている「飛翔」。

サービス会社28年間の思い出として、また、これからの新しい発展を願い発行された社員全員の写真集。みんなの思い出が詰まった、全国に展開する社員を結びつける大切な一冊となっている。

やはり、Face to Faceで遠く離れていても、相手の顔が見えることで、CSの社員の一体となった活動の潤滑材となっていることだろう。

今、電送は、ソリューション事業へ転換を図っているが、お客様の経営課題解決を図るお手伝いをCSは、昔から実践していたと思う。

ツールがFAXからIT技術へと幅を広げただけで、CSの基本である「お客様の視点で考え行動する」ことは変わっていない。このようにお客様とのつながりを大切に、ソリューション事業を展開していけば、これから大きく発展していけると思う。



伊福和生さん
(SS&SC事業企画
グループ)

■ 松下電送と松下電器事務機器事業部の事業統合(1998年)

栃木県出身である私としては、地元へ会社の事業所ができたというのが最初の印象。また、営業として取り扱える商品と仲間が増えたという楽しさと、逆に新しい商品知識の習得や新しい仲間との異文化コミュニケーションの不安感も正直あった。ただ、多少の文化の違いはあれど、営業という同業でもあり、電送マンに負けず劣らず個性的な面々で、その分馴染みも早かったと思う。(その裏で、早く馴染もうと努力したことは言うまでもない。)

PPCは、FAXみたいにシンプルな機器構成とは異

なり、オプションの多さと組合わせがなかなか理解できず、見積りも困難な状態で失敗もした。お客様にも関係者にも迷惑をかけた。一方で、カウンター料金というランニングビジネスの有難さと重要性を実感。本体を1台売ったら、ずっと売上がついてきて、翌月ゼロスタートでないという定期的な売上確保の安定感は、当時ハードビジネスだけであつた私たちには新たなビジネスの発見だった。これは今、TSS(トータルサポート&サービス)というシステムのランニングビジネスに繋がっている。



中野浩子さん
(SS&SCソリューションセンター)

■ 松下電送と松下電器事務機器事業部の事業統合(1998年)



中平英視さん
(DNCテクノロ
ジグループ)

97年11月に、松下電送株式会社と松下電器事務機器事業部との統合が発表された。当時、私はハイパードキュメントシステム(HDS)の開発に従事しており、9月に門真から宇都宮へ開発部隊を集結し量産設計の詰めを開始した直後であった。統合発表前から当時の技術研究所および画像通信事業部の開発者との共同開発を行っていたので、統合発表を聞いて来るべき時がきたと感じた。

HDS以前にもPD-3018など共同開発を行ってき

ており、市場から求められている商品を開発して、事業を発展させていくためにはお互いに協業が不可欠な状況にあったと思う。この統合の効果を開発初期段階から最大限に活かして、開発したSFD-Mも各部門の努力により好調に推移している。FAX・コピー・プリンターを製造販売する事業体が、紙文化を核にして事業統合を行った。その4年半後、今度は通信とイメージングを核に新たな飛躍を遂げようとしている。

■ 松下G事業再編に伴い、九州松下、松下通信とともに新会社設立(2002年)

入社してからずっとインターネット、特にIPv6関連技術の開発に携わってきた。また、その間、社内外を含めてIPv6の普及活動もしてきた。その普及スピードは遅いものだったが、着実に認知されてきた。そして、今回、新会社もIPv6に注目した。非常にうれしく思う。しかし、これまでは研究開発の段階で、これから本当に実のある形にしていかなければならない。その過程では、まだ課題もあるが、新会社の技術力を活かして、その課題を一つ一つ克服していきたい。

IPv6はあくまでもインフラにすぎないので、その

インフラで、どんなアプリケーションやサービスが提供できるかが重要だ。そういう意味では、これまで培ってきた商品とIPv6技術がいかにうまく融合できるかが鍵だと思う。

社外でIPv6に携わる人達と話すと、情報家電がIPv6普及の鍵の一つとして期待されており、その役割を松下グループに期待していると感じる。IPv6No.1企業を掲げる会社としては、IPv6対応商品を出すことで、その期待に応えていくべきだし、私もそれに貢献していきたい。



酒井淳一さん
(IPCC開発
グループ)

現在の会社概要

社 名 松下電送システム株式会社

本社所在地 〒153-8687
東京都目黒区下目黒2丁目3番8号
TEL 03-3491-9191

設 立 1945年(昭和20年)11月1日

資 本 金 15億円

売 上 高 981億円(2002年度3月期連結ベース)

従 業 員 数 2701名(2002年11月末現在)

株 主 松下電器産業株式会社(100%)

主 要 商 品 複写機、ファクシミリ、デジタル複合機、
新聞報道用システム、カラープリンター、
画像処理システム、ネットワーク関連システム、
ファクシミリ情報システム、電子黒板、モデムほか



役 員

代表取締役社長	山本 亘苗
常務取締役	水谷 幹男
取締役	森永 和彦
取締役	山内 豊彦
取締役	大滝 達彦
取締役	青山陽次郎
取締役	花井 衛
取締役	宮崎 兼二
取締役	永田 正
取締役	片岡鉄二郎
常任監査役	笈川 修三
監査役	奥地 幹雄
監査役	三坪 孝彦

関 連 会 社

松下電送グラフィックプリンティング株式会社
〒253-8587 神奈川県茅ヶ崎市萩園833

松下電送マニファクチャリング株式会社
〒321-8502 栃木県宇都宮市平出工業団地9-1

松下電送ソフトウェア株式会社
〒110-0015 東京都台東区東上野4-12-1 KTビル6F

松下電送ビジネスサービス株式会社
〒153-8687 東京都目黒区下目黒2-3-8

事業領域 ビジネス・ドキュメント、ドキュメント・ソリューション事業

松下電送システムのコアとなる事業分野。従来のFAX、複写機、プリンターなどのハード供給だけでなく、各機器のネットワーク化を図るアプリケーションソフトやシステムを充実させるとともに、デジタル複合機、ネットワークMFP、ネットワークプリンターなどのプラットフォーム強化に力を注いでいる。いつでも、どこでもさまざまな情報資源が利用できるワークスペースをつくるために、インターネット通信技術を駆使し、真に企業に貢献するビジネスソリューションを提供している。

IPコミュニケーション事業

パーソナルFAXを情報家電の柱とし、インターネットWebを含めた広い意味での家庭内マルチメディア端末へと開発を進めている。また一方で、先進のIPテクノロジーをコアに、家庭用ネットワーク機器の開発をめざすなど、業界をリードする夢のあるソリューションを家庭に提供している。

システム・ソリューション事業

システム・ソリューション事業では、マルチベンダー対応のシステム・インテグレーション、インフラ構築を主軸としたネットワーク・インテグレーション、24時間365日対応のトータルシステム・サポートなど、システムの提案からサポートまで、一貫したソリューションを提供している。また新聞報道市場で長年培ってきた通信技術・画像処理技術と最新のコンピュータ技術を活かし、出版・印刷市場においても最適なソリューションを提供している。

国内

新潟ファクトリーセンター
〒947-0045
新潟県小千谷市鴻巣町1260
TEL (0258) 84-2100

宇都宮ファクトリーセンター
〒321-8502
栃木県宇都宮市平出工業団地9-1
TEL (028) 663-3221

長野ファクトリーセンター
〒389-0512
長野県小県郡東部町大字滋野乙1633-1
TEL (0268) 61-0111

湘南工場
〒253-8587
神奈川県茅ヶ崎市萩園833
TEL (0467) 58-8701

本社(目黒)



新潟ファクトリーセンター



宇都宮ファクトリーセンター



長野ファクトリーセンター



湘南工場

海外

フィリピン松下事務機器株式会社
Matsushita Business Machine Corporation of the Philippines
C4-10, Carmelray Industrial Park 2, Barangay Punta,
Calamba, Laguna 4027 THE PHILIPPINES



フィリピン松下事務機器株式会社

歴代社長一覧



古野 伊之助
創業者
1891 ~ 1966



松下 幸之助
相談役
1974.7 ~ 1983.2



大森 吉五郎
会長
1962.11 ~ 1983.2
相談役
1983.2 ~ 1988.11

岡本 雄一
代表取締役
1945.11 ~ 1948.9

鷹嘴 寿
代表取締役
1948.9 ~ 1950.1
社長
1950.1 ~ 1951.5

上野 伊三郎
社長
1951.5 ~ 1953.6

瀧口 義敏
社長
1953.6 ~ 1953.7
1954.1 ~ 1956.1

塚本 義隆
社長
1953.7 ~ 1954.1



原 鴻
社長
1956.1 ~ 1962.11



木野 親之
社長 1974.7 ~ 1983.2
会長 1983.2 ~ 1985.2
(1962.11 ~ 1974.6
代表取締役として経営を指揮)



八尾 俊八郎
社長
1983.2 ~ 1987.11



齋藤 正
社長
1987.11 ~ 1991.6



渡辺 昭一
社長
1991.6 ~ 1994.6



樋野 隆
社長
1994.6 ~ 1998.3



片山 淳吉
社長
1998.4 ~ 2001.3



山本 亘苗
社長
2001.4 ~ 2002.12

歴史を語る一品

社旗、社章、過去の会社概要・社内報など、歴史を語る物を集めた。松下電送システムを語るとき、忘れてはならない一品ばかり。



社報、あさかぜ、DENSO FLASH、DENSO NEWS、DensoSystemNewsとタイトルを変えてきた社内報



東方電機、松下電送機器、松下電送、松下電送システムの商品をPRしたカタログ



目黒本社の従業員用通用門にある社名カンバン



東方電機、松下電送機器、松下電送、松下電送システムの時代を表す会社概要



30年史、50年史、社報縮刷版など当社の歴史をつづる貴重な資料



1967年に導入され、今も全国で419台が走っているサービスカー(写真は松下電送サービス株式会社時代のもの)

社歌

作詞 香取憲方
作曲 高木東六

朝風薫る 美しき青空に 歴史輝く 松下電送
躍進の道 象徴しつつ 高くひらめく 社旗清し
あ、 松下電送 松下電送
希望の光 栄えあれ 栄えあれ

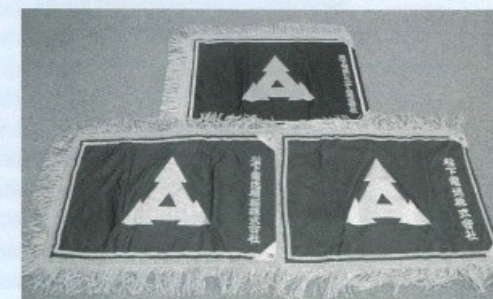
世紀の夢を 遙かなる大空に 馳せて励むは 松下電送
心技の粋を 誇りつつ 若き命の 燃ゆるもの
あ、 松下電送 松下電送
伸びゆく歩み 栄えあれ 栄えあれ

明るき笑顔 和気満つる工場に 響くこの社歌 松下電送
心ほとるに 結びつつ 意気と血潮の たぎるもの
あ、 松下電送 松下電送
あふるる力 栄えあれ 栄えあれ

(毎日朝礼時に歌われた社歌)

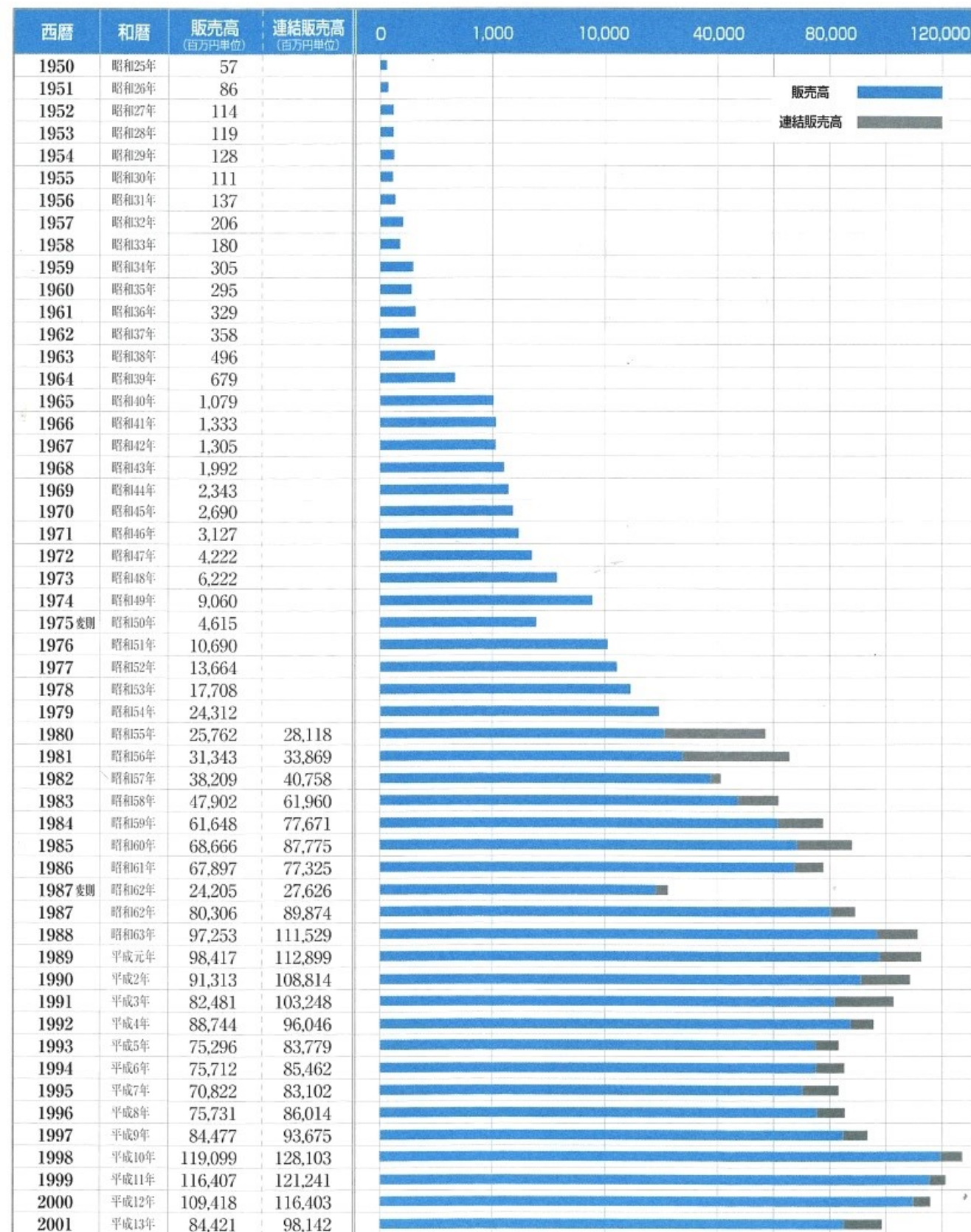


FAXの走査線をバックに、松下の「三松葉」マークを入れた特長ある社章



松下電送機器、松下電送、松下電送システムのそれぞれの時代に飾られた社旗

売上の推移



従業員数の推移

